

氏名・(本籍地) 森 覚 (東京都)  
学位の種類 博士(文学)  
学位記の番号 甲第85号  
学位授与の日付 平成23年3月15日  
学位論文題目 仏教絵本の研究 宗祖伝絵本の形成  
論文審査委員 主査 シャウマン ヴェルナー  
副査 司馬春英  
副査 伊藤淑子

## 森 覚氏 学位請求論文審査報告書

### 「仏教絵本の研究 宗祖伝絵本の形成」

#### 論文の内容の要旨

本論文は「仏教絵本の研究 宗祖伝絵本の形成」と題し、近・現代日本の仏教絵本、特にこのジャンルの中核である宗祖伝絵本を研究の対象にしたもので、比較文化的絵本研究に属する。300頁あまりの序論、本論(6章)、結論、注釈、419冊の一次資料と392冊の参考文献(インターネット・ホームページを含む)、4つの表、(森氏の制作になる)仏教絵本総合目録データベースの説明、および122頁の図版からなる論文である。

序論では本論文のテーゼとして、今まで無視されていた仏教絵本はキリスト教絵本と同じように一つの重要な絵本ジャンルであることを主張する。新しい分野の学際的な研究として、まず、多方面の先行研究(絵本研究一般、仏教児童文学研究、仏教文学研究、仏教学、美術研究、近代仏教史研究、宗教学、絵解き研究、近世戯作研究、児童文化研究)と方法論(構造主義的記号論、図像学、絵本研究でよく扱われるアルチュセールのイデオロギー論)を検証することから始めている。

本論では常に先行研究を応用し、仏教絵本を考察する。第1章ではまず、仮説として仏教絵本の概念を定義する。即ち、狭義的には、「仏教布教を目的として子ども向けに作られ、言語テキストと視覚テキストを組み合わせた相互補完的メディア」であり、広義的には、「仏教説話や地藏菩薩の昔話など、仏教的思想、事象・事物をテーマ・モチーフとした絵本」も仏教絵本に含めることにする。森氏は取集中の仏教絵本を分類するため、日本図書館協会の日本十進分類法を応用し、「伝記絵本」、「経典儀礼絵本」、「縁起絵本」、「説

話絵本」、「その他」を区分し、そして仏教童話研究に習い、「伝記絵本」の下位カテゴリーの「僧伝絵本」の下にさらに「宗祖伝絵本」をおく。

第2章では、仏教絵本が成立した背景としてまずは日本仏教とキリスト教との絡み合いと近代公教育が導入した図像教授法を考察し、その複雑な関係を明らかにする。近代の仏教界は最初、子ども向けの宗教教育にそれほど力を入れなかったが、キリスト教の布教活動から影響を受け、図像の教育的効果を理解し、大正12年に、(確認できた)初めての近代仏教絵本として眞宗各派協和會が『親鸞聖人エバナシ』を出版した。

第3章で森氏は、近代仏教絵本の変遷史を考察し、作品や出版状況を分析しながら4つの時期を区分する。大正時代から終戦までは作品はまだ少ない草創期である。終戦から昭和29年までは、27年までGHQの軍政もあり、キリスト教や民主主義の思想的影響が見られる。昭和30年から平成元年年まで、日本仏教保育協会が中心となり、仏教保育事業が隆盛したことから、昭和40年代になると出版ラッシュが起こる。第4期は現在までで、世紀末思想や不景気の影響で、ヒーリング系の詩的作品という新しいタイプの仏教絵本が目立つ。

日本仏教絵本史で宗祖伝絵本の中心的存在が明らかになったため、第4章では、その構造と性質を考察する。元来の僧伝と比較し多くの宗祖伝絵本を研究の対象にし、ロラン・バルトの機能体分析などを用いて宗祖伝絵本の物語構造を示す。また、子ども読者の信仰の手本である宗祖伝絵本をアルチュセールのイデオロギー論を用いて分析し、社会の諸イデオロギーの呼び

かけによる子どもの仏教徒そして日本人としての主体構築を論ずる。

第5章では、昭和26年に宗派教団とつながりのない講談社が発行した『日蓮上人』を考察する。1867年に刊行された『日蓮大士眞實傳』などと比較し、時代とともに変わるイデオロギーの呼びかけを考察する。講談社の『日蓮上人』は「講談社の絵本」の美しい日本画をもって、敗戦により自信を失った日本人に、日本文化の美しさを再確認させ、日本人の「民主主義」的要素を持つ「偉人」として、日蓮を読者に紹介する。

第6章では、浄土宗が監修し、仏教絵本や漫画を出版する大道社が制作した『教育えほん わたしたちのほうねんさま』（昭和49年）を分析する。この作品の『法然上人絵伝』に由来する絵本のイラストはともかく、語呂のよい文章と左右対称構造の画面構成が読者を魅了する。子ども読者は若いころの法然と一緒に遊び、修行する法然と歩み、法然の弟子になり、最後に手を合わせお母さんと浄土宗宗歌の「月影の歌」を歌う。キリスト教の時禱書から影響を受けたと考えられるこの作品は「自然に」子どもの信仰心を養う。

結論の第7章は、本論をまとめて、近代の仏教絵本は、西洋キリスト教と仏教の文化接触が生んだ混合物で、日本の絵本の一つのジャンルであることを立証する。

### 審査結果の要旨

絵本研究を基盤とし、学際的なアプローチをとっている本論文は、仏教絵本研究という新しい分野を開拓するものである。キリスト教布教とキリスト教絵本が仏教絵本に及ぼした影響の考察、および、言語テキストと視覚テキストからなる絵本というメディアのクロス・ジャンル研究は、比較文化研究でもある。

西洋の絵本はキリスト教から始まり、宗教絵本がその中心的なジャンルであり、宗教教育になくはならないものであるのは常識であるが、近・現代日本の仏教絵本は、その存在さえ知られていないほど、絵本研究や仏教文化研究の分野において無視されて来た。本論文の独創性は日本の仏教絵本の歴史と性質を明らかにしたことにある。

図書館等にほとんど収蔵されていなかった仏教絵本を集めるのは、この研究において森氏の最初の仕事であったが、これからの研究課題でもある。近・現代仏教絵本の歴史は大正時代から始まるとひとまずは言えるが、記録もあまりないので、今後、新しい発見も可能である。この論文の発表と仏教絵本総合目録データベースの公開によって研究が盛んになることが期待で

きる。（森氏の活発な研究活動の甲斐あって、本年度の絵本学会は大正大学で行われ、そのテーマは仏教絵本である。）

新しい研究分野を開拓するため、森氏は学際的な視点を持ち、多方面の先行研究を綿密に調べ、適切な研究方法を選んだ。序論におけるその説明は短い、本論中や注釈において十分言及している。

第1章では本研究の基盤を作るため仏教絵本を定義する。そのために戦前のわずかしかない仏教童話研究に豊富な仏教文学研究と宗教児童文学研究を加え、絵と文からなる絵本を分析のためにさらに最近の漫画研究と図像学を応用し、仏教絵本の下位カテゴリーを分類するためには図書分類法を用いている。本論文は仏教絵本総合目録データベースと共に、これからの研究の基盤ともなる。

第2章は、仏教絵本を生み出した明治時代からの仏教、政治、教育の入り組んだ歴史を厳密に探る。仏教絵本におけるキリスト教の影響と西洋的教育学の働きについての言及はまさに比較文化的研究である。そしてこの章は森氏の調査力の証でもある。

第3章で森氏は、大正時代から始まる仏教絵本の歴史を4つの時期に区分する。とくに初期に関してこれからの研究によって変わることもあろうが、仏教絵本史概説として役に立つ。

第4章では、多数の宗祖伝絵本を対象とし、比較文化的メディア研究となっている。ロラン・バルトの機能体分析などを用いて宗祖伝絵本の物語構造を明らかにし、最近では日本の絵本研究でも使われるようになったアルチュセールのイデオロギー論でその絵本が子ども読者の及ぼしている影響を分析し、絵本のメッセージが時代によってどういうふうに変わるかを論じている。

第5章と第6章では、第4章で明らかにした宗祖伝絵本の性質と機能の具体的な事例として、一般出版社の講談社が発行した傑作『日蓮上人』と宗派関係の大道社の『教育えほん わたしたちのほうねんさま』を分析し、仏教絵本の様子をわかりやすくする。

第7章は結論で本論をまとめ、あらゆる分野における仏教絵本の必要性を明らかにする。

本論文の弱点といえば、もう少し絵本の表現方法についての分析がほしかった。森氏はあまりにも早く記号表現から記号内容に至る。しかしそれにもかかわらず、本論文はこれからの絵本研究に大きな影響を与えたとともに、資料としても欠かせないものである。（そのために誤字脱字を直してもらふ必要はある。）

以上本論文の長点・弱点について述べてきた。審査

委員会は本論文を精読の後、口述試験を行い、論文のいくつかの問題点をも解明しえた。その結果として、本論文が博士の学位授与に値するものと認めたことを、ここに報告する。